

参 考 図 書 の 書 評

Reference Book Reviewing

長 沢 雅 男

*Masao Nagasawa*

*Résumé*

The book review of reference books is of vital importance, for it is a primary guide to librarians in choosing titles for their collections. But there is no reviewing journal of Japanese reference books *per se*. Accordingly, the writer of this article examined the desirable way of book reviewing in Japan after the example of well-established reviewing journal, *Subscription Books Bulletin* (SBB).

No principle of evaluation can apply equally to every reference book. Nevertheless, since all reference books have the same basic purpose as the book of information, they share several features in common. In order to set the pattern of reference book reviewing, it is necessary to evaluate these features concerning scope, treatment, arrangement, proposed audience and format.

Judging SBB in terms of its own stated objectives and the reviewing practices, it is an example of successful venture. While the quality of reviews appeared in SBB is usually considered among the most reliable to be found, the small number of books reviewed and the time lag between publication of the book and appearance of the review are disappointing.

Fortunately, however, there are other reviewing media which make up drawbacks of SBB. For instance, the regular column of *Wilson Library Bulletin*, "Current Reference Books," reviews larger number of books and certainly more promptly than SBB.

From the above it is desirable for us to have at least two types of reviewing media. One is the lengthy, critical type of review preferably published under professional association's auspices. The other is the short type of review which is usually geared for specific kind of libraries.

序

I. 書評とは

II. 参考図書

---

長沢雅男：慶応義塾大学文学部図書館・情報学科助教授。

Masao Nagasawa, Associate Professor, School of Library and Information Science, Keio University.

## 参考図書の書評

### III. 参考図書の評価

### IV. 参考図書の書評

### V. 書評の問題点

## 結語

## 序

参考図書の出版点数は年々相当数にのぼり、<sup>1)</sup> そのうちにはすぐれた内容のものが少なからず含まれている。このような参考図書の出版状況はレファレンス・サービスを発展させる好条件を整えるものである。

「レファレンス・サービスは、第1にどんな参考図書がこれまで出版され、現在出版されつつあるかという知識、第2にこれらの参考図書のそれぞれの評価、第3に実際に役立つそれぞれの参考図書を利用する知識に依存している、<sup>2)</sup>」といわれている。もちろん、レファレンス・サービスが参考図書のみを利用して行なわれるわけではないが、それに大きく依存していることは否定しえないところである。

わが国の現状をみると、第1の点、つまりどのような参考図書が出版されているかについて知るには、やや発行が遅れるけれども、『日本の参考図書 四季版』を利用することによってほぼ目的を達することができる。

しかし、*Booklist*、*Wilson Library Bulletin* などに収載されているような参考図書のための書評が未発達であるために、選択の指針を得るのが困難な状況にある。今後ますます参考図書の出版が増加することは歓迎すべきことではあるが、同時に、それらのうちから適切なものを選択するためのツールがなければ有用な参考図書が発掘されないでしまう恐れがある。

このような意味から、新刊のニュースを得るためばかりでなく、旧版あるいは同類書との比較に役立つ標準的な書評誌(紙)の出現が望まれる。したがって、さしあたり参考図書の書評のあり方を検討するのは時宜にかなうものと考えられる。

## I. 書評とは

書評をテーマとしてとりあげる場合、まず書評というものをどのように解するかを明らかにしておく必要がある。というのは、書評と評論ないし文芸批評とがしばしば混同されているからである。そこで、本稿では、両者を明確に区別できないまでも、別種のものとする立

場から書評の問題をとりあげることにしたい。

Llewellyn Jones によれば、書評すること (book reviewing) と本を評論すること (criticism) の違いは簡単に述べる事ができるとして、次のようにいっている。

もしあなたが本を読んで、その内容の要旨を書いて、それがカバーする分野について述べるとしよう。多分、文体について言及することがあるかもしれない。そうであるならば、書評を書いたことになる。つまり、あなたは読者となる人に本に何が書かれているかを知らせたのである。報知するという仕事をしたのである。そして報告者のように、あなたは自分の考え方を加えることはしない。他方、あなたが自分の見地から本について述べるならば、すなわち、その本がよい本であるとか、悪い本であるとか、その理由を付して述べるならば、あなたは評論を書いていることになる。<sup>3)</sup>

しかし、書評は本来批判的要素をもつものであり、書評者の主観的立場はどんなに避けようとしても結果的に書評に含まれてくるものである。例えば、本の一部を強調して紹介したり、無視したりすること自体にも評者の主観が介入する。

したがって、書評と評論との区別は Wayne Gard による次のような見解にしたがった方がよい。

評論一般は著者の全作品あるいは特定の時期の一群の著者にかかわるだろう。評論は読者が多かれ少なかれ論じられている著者や本を知っているものと仮定しており、それはある期間に出版された著作を扱う。これに対して、書評は通常一冊の本に限られており、読者はその本についてよく知らないことを前提とし、しかも書評は一般に出版されたばかりの著作を扱う。<sup>4)</sup>

この見解によるならば、書評はある本、とくに新しく出版された本の特徴を明らかにし、その価値を評価する

ことを目的としているといえる。新刊書であれば、読者がそれを知らないわけであるから、当然その本の性格を説明しなければならない。

また、評価をするとなると、何らかの評価基準が必要となる。そのためには、評価の対象が何であるかを確定し、評価のための着眼点を検討しなければならない。文学作品、技術書、美術書など、それぞれに目的があり、すべての本に共通にあてはまる評価上の着眼点は極めて限られているからである。

ところで、参考図書について共通する評価上の着眼点を選び出すとすれば、どのような点が見出せるだろうか。そのためには、まず参考図書を定義し、それがどのような特性をもっているのか、共通要素を抽出する必要がある。

## II. 参考図書

参考図書は“reference book”の訳語であるが、特定の情報を求めて参照されるものがすべて参考図書とよばれるわけではない。ある意味では、どんな本でも参考図書として用いることができるが、図書館における術語としての参考図書はより限定的意味において用いられている。すなわち、*ALA Glossary*によれば、参考図書の見出しのもとに次のような定義が与えられている。

- ①その配列および扱い方が、通読されるようになっているのではなく、特定の情報記事が調べやすいように企画されている図書
- ②その利用が図書館の建物内に限られている図書

参考図書を①の意味に解するならば、Mudgeのいう“ある特定の情報を求めて調べるとか、参照できるように意図されている種類の図書、<sup>55)</sup>”という考え方と一致する。この種の図書は“範囲が包括的で、扱い方が圧縮的で、迅速かつ正確に情報が見つかるようにある特別な計画にもとづいて配列されている。”<sup>6)</sup>

このような意味の参考図書に含まれる代表的なものとして辞書、百科事典、各種の専門事典、便覧などをあげることができる。もっとも、これらはタイプとしての名称であって書名がそうであるからといって参考図書になるわけではない。例えば、書名に事典とか便覧ということばが使われているものであっても、内容的にみて参考図書とはいえないものが少なくない。

また、いわゆる参考図書は類似の名称をもつ学習参考

書や参考資料と混同されることがある。学習参考書は学習のために参考にされる種類の図書であり、そのうちには参考図書であるものがかなり含まれているが、本来の参考図書とは別種のものである。参考資料は特定の目的のために、たまたま参考に使われた資料であって、必ずしも参考図書ではない。例えば、雑誌論文とか各種の報告書がしばしば参考資料として扱われている。

特定の図書館で参考図書扱いにしているために、参考図書とよばれている種類のものもある。この種のもは *ALA Glossary* の定義②に相当する。その多くはいわゆる参考図書であるが、一般図書も含まれている。例えば、キリスト関係のある図書館では聖書が参考図書として扱われている。そのほか、自社の社史を参考図書としている専門図書館、新聞の縮刷版を参考図書扱いにしている公共図書館もある。

参考図書扱いになるものの中には、個々の図書としては当然一般の図書として扱われるものであっても、叢書、選集その他のコレクションとしてまとまると、参考図書と同様の役割を果たすものがある。例えば、『写真作家伝叢書』(明治書院)、『人物叢書』(吉川弘文館)などのセットである。

以上のほかに、個々の図書自体についてみると、参考図書と一般図書との中間的な性格のものが少なくないために、参考図書か否かを分類するのは必ずしも容易ではない。実務上、しばしば参考図書であるかどうかについて意見が対立するのも、性格のあいまいな図書があるからである。

したがって、性格のあいまいな図書について、本来の参考図書であるかどうかを識別するためには、参考図書であるための要件を満たしているかどうかを確認する必要がある。その要件を抽出するために、上述の *ALA Glossary* の定義①を敷衍することにしよう。

第1に図書であること。今日、図書(book)ということばは非常に包括的な意味に用いられることが多い。例えば、Ralph Shawは“図書ということばを図書館で通常蓄積され、提供されている情報を伝達するのに使われているあらゆる種類の資料を含む総称の意味に用いよう”<sup>7)</sup>といている。また、Louis ShoresもShawと同じように“図書は人類が生きている証拠を示すところのすべての伝達可能なメディアを包括する。図書ということばは本製や複製本のもの、雑誌やパンフレット、絵画や地図、フィルムやフィルム・ストリップ、テープやディスク・レコード、ラジオやテレビで放送したもののお

## 参考図書の書評

よび 40 以上の形態のものを含む<sup>9)</sup> といっている。

しかし、参考図書という場合の図書は簡便に持ち運びができて、しかもページを繰ることによって容易に特定の個所を参照することのできる形態のもの、すなわち冊子体の図書ということになる。

図書の発達史によれば、さまざまな形態を経て、今日最も普通に一般の形態と認められる冊子体の図書に落ちつくにいたった経緯が明らかになるが、卷子本、折本などが過渡的な形態であるのに対して、現在の冊子体の図書はこれ以上改善の余地のないほどの極致的形態であると考えられる。

ページを繰ることによって特定の個所を容易に開閉することができるし、持ち運びも簡便にできるという冊子体の図書の形態的特徴は、参照するための道具としての参考図書の重要な要件の一つと考えられる。したがって、卷子本のように特定の個所を参照するのに不便な形態であるとか、テープやフィルムなどのように録音再生機とかリーダーなどの機械装置を利用しなければ記録内容を知ることのできない種類の情報源は参考図書としての形態的要件を欠くものといえる。

また、冊子体の要件を満たすものであっても、パンフレットとよばれる 32 ページ以下あるいは 64 ページ以下の小冊子とか、極めて小型の本などは除外される。これらには包括的な情報内容を収録しているものが少ないからであり、その形態に基づいて除外されるというわけではない。したがって、この種の形態のものであっても、他に同じような内容の情報を含む参考図書とか同種の表現形式をとる参考図書がない場合には、参考図書扱いになることが多いだろう。

参考図書の要件を考える場合、形態的な面以上に、内容形式の面が重視されなければならないことはいうまでもない。そこで、次に特定の情報記事を内容とするという面の要件を検討することにしよう。

Pierce Butler<sup>9)</sup> は文明人は自分の感情を表現するためと情報を記録するためという二つの一般的な目的によって本を書くといい、図書を“情緒の書”と“情報の書”とに大別している。すなわち、歴史的に古くから存在していた本は前者に属するもので、讃美歌、民謡、叙情詩、叙事詩その他いろいろな物語であり、これに神学、歴史、哲学、さらに科学の基礎原理といった情動的要素が次第に加わって、後者に属する本がふえてきたというのである。したがって、情緒的体験を求めるためには情緒の書を利用し、情報を得るためには情報の書を利用すればよ

いわけである。

もちろん、図書をこのように二大別しても、利用面においては、両者はしばしば混用される。しかし、逆の利用は例外的な場合に行なわれるのであって、両者の一般的な区別を犯すものではない。したがって、Butler の大別の仕方によれば、参考図書は明らかに情報の書である。ただし、情報の書がすべて参考図書であるとはいえない。

どのような図書であっても、情報を広義に解するならば、何らかの情報を記録内容としているといえる。そのうちで、参考図書としてふさわしい内容のものは一貫して利用者に情報を伝え、何かを知らせることを目的としている。このことはしばしば序文、まえがきなどに表明されている。つまり、参考図書は“明確な質問をもって読者のために作られており、それ自体質問を提示するようなことはしない”<sup>10)</sup> ものである。ちなみに、それ自体質問を提示する図書というのは、たとえば哲学的な著論に多くみうけられる。この種の論文は読者に対して何ら回答を与えようとする意図はなく、疑問を疑問として提示するために書かれたものである。

利用者が何かについて情報を得ようとして図書を利用する場合、利用者の態度、心構えとは無関係に、その図書の目的に即した利用方法をとることによって必要な情報が得られる種類の図書でなければならない。しかも、それは事実についての知識を記録内容とするものであり、感情や価値判断や意思や計画を内容とするものは、この場合除外される。

したがって、何らかの事実を解説しているものとか、それらの情報への手がかりを与えるために何らかのかたちで情報を変換ないし再構成したものが参考図書の内容としてふさわしい。その意味から、参考図書はオリジナルな 1 次情報を収録していることはまれで、1 次情報を再構成して 2 次情報化した結果を記録内容としている。いいかえるならば、参考図書はいわば生の知識をろ過器にかけて得られた記録情報源である。

その性格のゆえに、しばしば参考図書の個性のなさ、面白みのなさに対する批判がなされている。例えば、三木清は辞書について、

現代の辞書は客観性を目差して発展して来たやうである。これは辞書としては確かに進歩であるに相違ない。その記述の仕方も辞書的といった一種の型が出来て、正確とか簡潔とかを目的としている。<sup>11)</sup>

と評価しながらも、

だが、その代りに最近の辞書は一般に乾燥無味になった。[中略] 辞書によってものを知らうとしても客観的な辞書といふものは、だいいち面白く読めない。即座の必要には間に合ふが、永く続けて読ませるものではない。<sup>12)</sup>

と批判している。

しかし、参考図書は、本来、通読されることを目的として作られているのではなく、調査あるいは参照が容易にできるように編集されているのであればよい。Reference tools とよばれるように、いわば道具としてつくられたものである。したがって、参考図書は通読の対象となる読書資料ではない。それを利用することによって知識欲を満足させるといった楽しみを与えてくれることはあるかもしれないが、参考図書は本来楽しみを与えることを目的とするものではないから、面白く読めないという批判は当たらない。

この調査・参照が容易にできるように編集されているという点は扱い方や配列に特別の配慮がなされているということと表裏一体の関係にある。したがって、まず扱い方について検討することにしよう。

参考図書の扱う主題は広狭さまざまであるが、その主題範囲において情報を圧縮的に収録したものでなければならぬ。主題について専門的に追求し論述することはまれで、その概括的・縮約的知識を与えよとか、詳しい情報へ参照を指示するだけであることが多い。それは1次的情報を何らかのかたちで再構成あるいは再編成し、整合的・組織的・系統的なかたちで情報を提供することを主目的としているからである。したがって、幾つかの情報と結合したり単純化したりした2次的情報が主体となる。

そのために、情報を直截簡明に表現するように、できるだけ図版、挿図、表、図表、肖像、地図、統計などを用いることによって、利用者の視覚にも訴え、簡約された記述によっても理解しやすいうように工夫されている。

通読を予想してつくられる図書の場合には、多くの場合、論理的展開を考慮して全体の構成に関心が払われ、個々の項目は副次的に考慮されるにすぎない。これに対して、参考図書は内容の特定の個所だけが容易に利用できるように情報への手がかりを与える標出語のもとに長ささまざまな項目をまとめる形式をとる。

これらの項目への直接的な接近を容易にするには、だれにでも共通に理解できる一貫性のある配列方式を選ぶ必要がある。例えば、ことばによる場合には五十音順であったりアルファベット順であったりする。

このような一系配列方式をとるもの以外に、体系的な構成のものもあるが、多くは章節項程度にとどまらず、それ以下に細分し、下位概念を表わす名辞が比較的容易に見出せるように工夫されている。すなわち、配列は参考図書であるかどうかを識別するための重要な着眼点ではあるが、必ずしも一系配列である必要はなく、含まれている特定の情報が迅速・便利に検索できるような配列であればよい。つまり、記録内容が容易に検索できることが評価上の着眼点として教えられる。

普通の辞書のように本文の標出語から直接的に検索できる場合には他に検索上の補足手段を講ずる必要はないが、本文の項目や配列の面からだけでは含まれている情報が有効に検索できるとは限らない。

そこで、本文の項目からは接近することがむずかしい情報を検索することができるように索引がつけられる。すなわち、参考図書は本文の配列の仕方と索引とが相まって、記録内容の検索を容易にするよう配慮されていなければならない。

以上のように検討した結果、参考図書としては、最小限度、形態的には冊子体の図書であること、内容的には2次情報源であること、扱い方においては情報を集約的・圧縮的に記録しており、しかもその記録内容が容易に検索できるように工夫されていることという四つの要件を満たす必要があると考えられる。

これらの要件を満たす代表的な参考図書として2種類のものがある。その1は“濃縮情報源”ともいべき辞書、百科事典、便覧、図鑑、年鑑などであり、その2は必要とする情報へのガイドとして役立つ2次資料すなわち書誌・索引類である。

### III. 参考図書の評価

参考図書の書評において、要点をもれなく評価するためには、評価上の着眼点をきめておいて、その一つ一つを検討してゆく必要がある。そうすることが情報の書である参考図書の書評の型を決めるのに役立つことになる。パターン化された書評は読む楽しさを幾分減殺するだろうが、あたかも原著論文に対する抄録のように参考図書のメタ情報として有用性を発揮するものとなる。

既述のように、参考図書が少なくとも四つの要件を満

## 参考図書の書評

たすものであるとするならば、共通する着眼点はこれらの要件から導き出せるはずである。

例えば、Shores<sup>13)</sup> は評価事項を権威、範囲、扱い方、配列、形態、特質の6項目にまとめているが、これらは参考図書の要件をとりあげる形態的、内容的側面と扱い方に着目して展開した留意事項にはかならない。この点を明らかにするためにこれらを要約的に列挙してみよう。

### I 権威

- 1 編著者——経験、学歴などかどうか
- 2 後援者——出版者、後援団体などかどうか
- 3 由来——新規出版か、改版ならば改訂度かどうか

### II 範囲

- 4 目的——目的をどの程度達成しているか
- 5 対象範囲——主題範囲、限界はどうか
- 6 新しさ——資料の新しさはどうか
- 7 参考文献——その学術性はどうか、付加的情報への指示はどうか

### III 扱い方

- 8 正確さ——徹底度、信頼度、完全さはどうか
- 9 客観性——偏向の有無；調和のとれた扱い方か
- 10 文体——利用者に合致した書き方であるか、読みやすいか

### VI 配列

- 11 順序——分類順、年代順、地域順、アルファベット順などのうち、いずれか
- 12 索引——索引や参照で本文の配列を適当に補足しているか

### V 形態

- 13 造本——製本、紙質、活字などかどうか
- 14 挿図——良質か、真に重要か、本文と直接に関連しているか

### VI 特質

- 15 特徴——他の資料と区別できる特徴は何か

また、その後15年を隔てて刊行された William A. Katz によってまとめられた同種のテキスト<sup>14)</sup> においても、参考図書を評価するために、目的、権威、範囲、利用対象および形態という五つの点をあげているが、Shores の着眼点との内容的な差異はあまりない。

拙著<sup>15)</sup> においても、上掲 Shores のもののほか、Mudge<sup>16)</sup> がとりあげている着眼点を参考にして、評価上の着眼点を編著・出版に関する事項、内容に関する事項および物理的形態に関する事項の三つにまとめることにした。

編著・出版に関する事項というのは Shores らのいう“権威 (authority)”にかかわる事項であり、①編著者、②出版者、出版年が含まれている。ちなみに、権威ということばは利用者に内容について納得させる力ないしは内容がすぐれていることを利用者に承認させる心理的な力というほどの意味に用いられているのであり、このもとにあげられている各事項は内容を評価するための目安であるにすぎない。

次に、内容的事項としては、範囲、利用対象の設定、記述、表現方法、配列方法、検索方法、収録情報の新しさと正確さをあげている。<sup>17)</sup> 参考図書の評価においては、他のいかなる要素よりも優先して、これらの事項が十分検討されなければならないことはいうまでもない。

しかし、道具的に使われる参考図書であることを考えるならば、その評価において形態的要素にも留意しなければならない。それは本の物理的な側面であり、印刷、挿図類、造本に分けて点検することができる。

## IV. 参考図書の書評

### A. 一般的性格描写

上述のような着眼点をおさえながら参考図書の書評をまとめようとする場合、まずその参考図書はどのようなもので、どのような意図のもとに編集されたものであるかについて、それを全く知らない人でもはっきりと思いつくことができるように説明しておく必要がある。なぜならば、書評はその本について読者が何も知らないと想定してまとめられるものだからである。

書名あるいは副書名によって内容の範囲、利用対象などが明らかにされているが、それだけで不十分な場合は、序文とか凡例とか目次から得られた情報に基づいて補足的な説明を加える必要がある。こうして、その参考図書の一般的性格描写ができる。

また、参考図書は全く新規に出版されるもののほか、旧版に改訂を加え、あるいは増補し、新版として出版されるものが少なくない。したがって、この種のものについては、その由来を明らかにするならば性格描写に役立つだろう。

このようにまず書評する参考図書の一般的性格描写を

して、そこに表明されている目的を明確にした上で、現物にあたって点検し、目的として意図されたところと内容そのものが一致しているかどうかを確かめることによって、その参考図書がどの程度目的を達成しているかを評価することができる。

旧版あるいは同類書があれば、それとの比較において相対的な評価を下さなければならない。例えば、参考図書の書評誌として定評のある *Subscription Books Bulletin* の委員会でまとめられた *Subscription Books Committee Manual*<sup>18)</sup> (以下 SBB マニュアルと略す) では、「図書選択の問題解決に役立つ、その根拠が正当ならば、同じ本の旧版との比較、同じ時期の同類書との比較、書評をしようとする本と競合関係にある定評のある参考図書と比較するのがよい<sup>19)</sup>と規定している。したがって、もし比較の対象となる参考図書があれば、それを選定した上で、範囲、利用対象、それに応じた扱い方などについて検討する必要がある。

## B. 範囲

範囲については一般的なものか特定主題に限られているものかを明らかにする。後者の場合はその対象分野はいずれであるかが点検されなければならない。書名で明らかにされている主題は必ずしも自明ではないからである。例えば、『社会科学文献解説』<sup>20)</sup> という書誌では「社会科学」としてどの範囲の主題をカバーし、「文献解説」の文献というのはどのようなタイプの文献が含まれているのか明らかではない。したがって、この場合には経済学が主な分野であり、文献としては単行本と雑誌論文が対象となっていることを明らかにしなければならない。

また、*Encyclopaedia of the Social Sciences* (ESS)<sup>21)</sup> とその新版に相当する *International Encyclopedia of the Social Sciences* (IESS)<sup>22)</sup> のように、いずれも社会科学の全分野を包括する大事典であっても、サンプリングによって両者を比較した結果<sup>23)</sup> では、第1表に示すようにとりあげられている主題の重点のおき方に差異があらわれている。

範囲について点検する場合、主題によっては、それと関連する地域あるいは時代(期間)についても検討を加える必要が生ずる。地理関係の主題のように地域性を問題にする場合は地域範囲を、歴史関係の主題のように時代性を問題にする場合には時代あるいは期間の面から範囲を確定しなければならないことはいうまでもない。

## C. 利用対象

同じ主題であっても、利用対象をどう定めるかによっ

第1表 主要分野比較<sup>24)</sup>

	ESS	IESS
経済学	39	14
社会学	16	18
政治学	16	14
歴史	7	1
人類学	4	11
法律	2	1
心理学	1	16
公衆衛生	1	0
統計学	0	2
情報科学	0	2
合計 <sup>25)</sup>	86	79

注1. 両事典それぞれから100ページずつのサンプルを無作為に抽出。

注2. 100以下であるのは伝記あるいは参考文献リストだけを含むページがサンプルから除外されたからである。

て内容が違ってくるはずである。その主題を専門に研究する人が情報を求める場合と、専門以外の人がその主題について情報を求める場合とでは要求内容が異なるからである。

しばしば利用対象の別によって、学術的な研究者向きと、通俗的な初学者向きとに参考図書を大別する方法がとられることがある。例えば、『岩波理化学辞典』(第3版, 1971)は専門の研究者を対象として、物理学、化学関係を中心に数学、天文学、地質学、鉱物学などの事項を学術的に解説した事典であり、*Kagaku no Ziten* (第2版, 1964)は初学者向きに科学の基礎的な事項を平易に解説した事典である。

しかし、参考図書の場合には、宣伝あるいは販売方針が強くうち出され、専門研究者、一般人、学習者などすべてを利用対象として抱え込もうとする傾向がある。このような意図が内容面に十分反映したものであるかどうかを知るためには、とりあげられている事項だけでなく、その扱い方についてもあわせて検討しなければならない。

## D. 扱い方

利用対象に関連して扱い方を検討する場合、その記述・表現方法がどのようになっているかを確かめなければならない。情報を集約的・圧縮的に記録することを要件とする参考図書においては、できるだけ専門用語を用いた

## 参考図書の書評

方が正確で、しかも簡潔に表現することができる。しかし、それでは専門的知識がなければ理解しにくいことになる。したがって、専門家以外の利用者を対象とする参考図書では専門用語はできるだけ避けて、平易な解説を加えて理解しやすくする必要がある。この点に成功しているかどうかの評価を大きく左右することはいうまでもない。

扱い方に関しては、対象とする主題範囲において、あらゆる事柄を平均的に扱おうとしているのか、特定の事柄を重点的に扱おうとしているのかという問題もある。例えば、第1表にみられるように、同系の事典であっても、時代が違えば重点のおき方も変わってくる。

また、同じ主題を対象とする場合でも、例えば、『経済学小辞典』<sup>24)</sup>はマルクス経済学中心の扱い方であったが、その新版に相当する『経済学辞典』<sup>25)</sup>は近代経済学や隣接分野の項目を大幅にふやしているといった違いも生じてくる。

参考図書において、ある主題が扱われる場合には、客観性を目指そうとするために、執筆者の個性が失われ、平均的な扱い方をすることに心がけられる。

しかし、内容を客観的に扱うことが参考図書の要件ではないから、客観性の有無によってその評価が左右されるわけではない。また、実際に客観性ということの問題にすると、その評価が著しくむづかしくなる。三木 清はすでにとりあげた一文のなかで、辞書の客観性として次のようにもいっている。

辞書の客観性といふことは一見簡単な事柄のやうで実は複雑な問題である。語学や自然科学の辞書のやうな場合にはともかく客観性の基準が定められ得るにしても、社会科学更に哲学になるとなかなかむづかしいことだ。従って、勢い術語の単なる説明に終ったり、種々の学説をただ形式的に分類して示すに止ったりすることになる。それが「辞書の客観性」といふものであるかも知れないが、それが真の客観性であるかどうかは認識論的にやかましくいへば、いろいろ問題があるであらう。<sup>26)</sup>

ドイツの Herder 社から出版された参考図書にはカトリック的立場から編集したものが多い。例えば *Staatslexikon*<sup>27)</sup> は法律、経済、社会に関して一貫した観点からまとめられているところに特徴がある。したがって、内容の扱い方が客観的ではないということは必ずしもそ

の評価を低くするものではない。むしろその編集方針さえ心得ているならば、全体の統一を図ることに主眼をおいて術語の字句を中心に解説したり、学会の通説、異説を形式的に分類して列挙しただけの参考図書より有用であることが多い。

### E. 項目・配列

検索の難易は本文の項目の大きさならびにその配列方法によって大きく左右される。小項目主義をとる参考図書は扱っている主題における最下位概念をあらわす名辞を標出語として選ぶ方針をとるもので、多くの場合一系配列の方式をとる。これに対して、大項目主義をとるものは、その主題のうちで比較的上位の観念をあらわす名辞を標出語とし、そのもとで下位概念をできるだけ多くとりあげて解説するという方針をとるもので、体系的に構成されていることが多い。

小項目と大項目では、いずれの方式をとるものがよいかは一概にいえないが、小項目主義をとる参考図書の本文において標出語が五十音順あるいはアルファベット順など一系配列の方式をとる場合には、求める項目に比較的容易に接近できる便利さがある。しかし隣合う標出語のあいだに何ら歴史的・論理的な関係はないという欠点もある。したがって、この種の配列をとる場合には、相互の関連づけのために適切な参照指示がなされているかどうかについて検討が必要となる。

他方、大項目主義のものでは体系的、論理的に内容を統一することが容易であり、断片的な記述の寄せ集めになりがちな参考図書の弱点を補うことができる。

大項目主義をとるものでは五十音順あるいはアルファベット順などの一系配列にしても実効性はうすい。そこで何らかの体系に従って配列されることが多いが、この場合には隣合う標出語の論理的関連づけは比較的容易である。しかし、その反面あまりに人為的すぎる欠点を伴うことがある。

そのために、目次や相互参照だけでなく、単純な検索手段を講じるために、索引をつける必要がある。したがって、参照や索引については本文の項目の大きさや配列との関連を考慮し、その種類および精度を評価しなければならない。どんなに豊富な情報を収録しようとしても、適切な検索手段が講じられていなければ、参考図書としての有用性は著しく減殺されるからである。

### F. 体裁

参考図書が情報を圧縮的に収録している点はその形態的特性にも影響を与える。例えば、しばしばインデッ

ペーパーのような薄手の紙質のものが選ばれ、一般の図書よりも活字が小さく、字間、行間が詰められることが多い。豊富な情報を収録した図書をできるだけハンディな形態にまとめるにはこうするのやむをえないことであるが、少なくとも圧縮的に収録するために利用上妨げが生じてはいないかどうかの点検は必要である。

また、コンパクトにまとめ、しかも視覚に訴えて理解を助けるために、図版、表、図表、地図などの挿図類を本文中に織り込んだものも少なくない。したがって、挿図を含む参考図書の書評においては当然これらについて言及がなされていなければならない。

SBB マニュアルでは、「もし満足すべきものであれば、体裁はよいと簡潔に述べるだけで十分であろう」と述べ、「とくに望ましい注目すべき特色は推賞し、もし体裁があまりにも劣っていて、それを購入するのに注意した方がよいならば、特別に不適切な点、例えば不鮮明な印刷、不満足な挿図、実用的でない製本などに触れるべきである<sup>28)</sup>」としている。

以上のような要素、すなわち一般的性格描写、範囲、利用対象、扱い方、項目・配列、体裁などについて言及するほか、SBB マニュアルでは長所短所を指摘した上で、最終パラグラフを要約にあてるべきことを規定している。すなわち、「この要約は被書評書の長所短所を簡潔にとりあげるべきであり、それが目的を達成しているかどうか、意図している利用者に適しているかどうかを明らかにすべきである<sup>29)</sup>」としている。

## V. 書評の問題点

参考図書の書評に限らず、その「固有の方法や形式がまだ十分に意識的に追求されず、ほとんど執筆者ひとりひとりの経験や好みにゆだねられている<sup>30)</sup>」のがわが国の書評一般の現状である。

しかし、そのうちにも幾つかのタイプを見出すことができる。その1は記述的なものであって、単に被書評書が何を伝えようとしているのかを読者に知らせることを目的としている内容紹介にとどまる種類のものである。その2は評価的立場を濃厚に示すものであって、一方に宣伝文と何ら異なるところのないほどのチョウチン持ちの書評があり、他方に非難中傷に終始する書評がある。これらはいずれも極端なかたちの書評であるが、「情報の書」としての参考図書の書評がこのようなスタイルのものであってはならないことはいままでもない。

出版社の立場でもなく、仲間ぼめでもなく、ないもの

ねだりでもない、レファレンス・コレクション作成のための参考図書の書評であるためには、既述のような評価上の着眼点に十分留意しながら、被書評書のあらゆる側面を厳正に評価する書評家の態度を堅持しなければならない。

このような意味から、書評作成上の指針を与えているSBB マニュアルは「図書館専門職のための基準として構成されたものではない<sup>31)</sup>」と断っているが、書評のあり方を検討する上に極めて有用である。

また、このマニュアルに基づいて多くの専門家の協力のもとに作成されるSBBの書評<sup>32)</sup>は内容的にも形式的にも極めてすぐれているとして定評があるので、これを材料にして若干の問題を検討することにしよう。

SBB Reviews<sup>33)</sup>に再録された2カ年(1964年9月—1966年8月)間の書評(参考図書以外のものの書評を除く)57点について、評価上の着眼点がおさえられているかどうかを調べたところ、すべてについて完全に留意されていることが書評の記述面に現われている。

しかし、第2表からも明らかのように、書評の長さは一定せず、かなりまちまちである。概して、各巻毎に内容の異なる多数巻もの、類書と比較したもの、結果的に悪評となった書評は長くなりがちである。比較的長さについて規格化しやすい一般的性格描写および要約の部分だけ調べても、いかに長さがまちまちであるかが第2表によって自明である。

したがって、評価上の着眼点について十分留意した書評をまとめるためには、予め紙数を決めておくことは得策でない。書評の長さは被書評書の内容によって変わってくるからである。紙数が少なければ、本の簡単な内容紹介にとどまったり、内容の一部しか扱えないということになるだろうし、紙数が多すぎれば、被書評書が扱っている問題をめぐって、書評者自身の意見や感想で所定のスペースを埋めようとするにもなりかねない。

第2の問題は書評の速報性についてである。書評が評価上の着眼点を的確におさええているかぎり、被書評書の種類および内容によってその長さが不均一になるのやむをえない。しかし、書評にとって見逃しえない問題はその発表の遅れである。

元来、SBBをBooklistと合併させた方がよいとする主張は季刊のSBBを半月刊のBooklistに吸収することによって、書評の迅速な発表を期待するものであった。M. K. Gogginら<sup>34)</sup>によれば、1960年9月から1962年7月までにBooklist and Subscription Books Bulletin

参考図書の書評

第2表 書評の長さ (SBB, 1964.9-1966.8 による)

文献 番号 <sup>注1</sup>	書評の長さ <sup>注2</sup>			推 薦 <sup>注3</sup>				非 推 薦
	全 体	性 格 描 写	要 約	無 差 別	大 学 図 書	公 共 図 書	学 校 図 書	
1	283	30	19					○
2	193	15	27		○	○		
3	175	24	19	△				
4	194	17	17	○				
5	185	23	16	○				
索引								
6	147	22	15	○				
7	490	23	23					○
8	126	13	23	○				
辞書								
9	270	15	12	○				
百科事典								
10	473	17	31					○
11	208	11	11					○
12	507	17	21	△				
13	549	18	22					○
14	121	30	13					○
15	323	18	18	○				
16	160	5	16					△
17	243	23	18					○
18	376	19	29					○
専門事典								
19	206	20	16	○				
20	254	23	9			○	○	○
21	113	35	6	△				
22	93	21	16	○				
23	133	20	10		△	△		
24	153	20	8	○				
25	147	27	29	△				
26	142	15	9		△	△		
27	177	8	14	△				
28	186	25	6					○
29	138	17	15					○
30	167	15	22					△
31	190	25	14					△
32	182	23	13		○	○	○	
33	174	25	17		○	○	○	
34	180	12	17			○	○	○
35	47	22	11		○	○	○	
36	146	26	9		○	○	○	
37	209	19	11		○	○	○	

38	212	19	27						○
便覧									
39	136	12	9					○	○
40	102	6	12						○
41	207	11	9					○	
42	192	8	15					○	
人名事典									
43	157	8	14					○	
44	69	22	11					○	
45	260	24	14					○	
名鑑									
46	184	14	8					○	
47	121	23	18			○	○		
48	140	24	11			○			
49	202	27	18						△
50	164	12	13						○
年鑑									
51	176	21	11					○	
地図帳									
52	104	7	10				○	○	
53	288	11	22				○		
54	297	21	8				○	○	
55	263	8	5				○		
56	153	15	9				○		
57	197	12	17				○		

注1. 本稿末の被書評書のリスト番号と一致する

注2. 数字はすべて行数で表わす

注3. いずれかの館種にあてて推薦している場合には、その欄に ○ 印で、また何らかの条件を付している場合には △ 印で表示した

に収載された書評について調べた結果、平均8カ月の遅れがあるという。これは被書評書が *Publishers' Weekly* に収載されてから書評が発表されるまでの期間を算定したものである。

SBBの数年間の書評のうちから、各号3点の書評を無作為抽出によって調べたところでは、

1934-37年	6カ月の遅れ
1938-41年	7カ月の遅れ
1942-45年	7.5カ月の遅れ
1946-49年	7カ月の遅れ
1950-53年	8カ月の遅れ <sup>35)</sup>

という結果が得られ、合併される以前の遅れ8カ月が合併後もそのまま続いているといえる。

その後の状況を知るために1968年9月から1970年7

第3表 書評発表の遅れ (*Booklist* 所収の SBB)

遅れ月数 <sup>注1</sup>	Vol. 65, no. 1~ no. 22 (1968年9月~ 1969年7月)	Vol. 66, no. 1~ no. 22 (1969年9月~ 1970年7月)
	2	1
3	1	1
4	1	2
5	1	1
6	2	2
8	1	1
9	1	1
10	1	2
11	4	2
13	1	0
14	1	0
15	2	1
16	1	0
22	1	0
25	0	1
不明 <sup>注2</sup>	4	5
書評点数	23	21

注1. *American Book Publishing Record* に被書評書が収載された月とその書評が収載された *Booklist* 発行月との差による概数である

注2. 書評はあるが、その被書評書の発行月が不明であるもの

月までに発行された *Booklist* の SBB 部分の書評の遅れを調べた結果が第3表である。早いものは2カ月程度の遅れであるが、1年乃至2年といった大幅な遅れが見られる。

第3に書評数の問題がある。どんなに内容的にすぐれ、迅速に発表されたとしても、書評の数が少なければ選択ツールとしての有用性は減殺される。一般に書評が長く詳細であれば、その数は少なくなりがちである。H. W. Whitmore が参考図書の書評を収載しているアメリカの5誌を選んで、1967年から68年にかけて各巻でとりあげている書評の点数を算定したところによると、次のような結果になっている。

<i>Choice</i>	307
<i>Wilson Library Bulletin</i>	234
<i>Library Journal</i>	218
<i>Saturday Review</i>	134
<i>Subscription Books Bulletin</i>	34 <sup>36)</sup>

この比較からも明らかのように、SBBの書評収録点数は他誌とは比較にならないほどわずかなものである。

その後も同様な傾向をたどっているが、最近の推移をやや詳細にみることにしよう。SBBは *Booklist* に完全に吸収されたが、その第65巻(1968年9月1日~1969年7月15日)、第66巻(1969年9月1日~1970年7月15日)および“Current Reference Books”を毎号連載している *Wilson Library Bulletin* の第43巻(1968年9月~1969年6月)、第44巻(1969年9月~1970年6月)の書評収録点数を比較したところ、第4表のような結果が得られた。*Booklist* は半月刊であるから、これ

第4表 書評収録点数の比較

発行月 <sup>注1</sup>	1968~1969		1969~1970	
	<i>Booklist</i>	WLB <sup>注2</sup>	<i>Booklist</i>	WLB
9	2	26	1	25
10	1	20	2	23
11	2	20	0	24
12	3	20	2	25
1	2	21	0	25
2	2	20	1	27
3	1	23	2	27
4	2	24	2	21
5	1	22	2	23
6	2	21	2	25
7	5	—	7	—
合計点数	23	217	21	245

注1. *Booklist* は半月刊であるから1発行月のもとに2号分を合計した

注2. WLBは *Wilson Library Bulletin* のこと

には毎号1点程度の書評しか載らないわけである。これに対して、*Wilson Library Bulletin* の“Current Reference Books”は書評は追込みのエッセイ・タイプの簡単なものであるが、毎号20点から25点をとりあげている。

さきに示したのは各誌の書評点数であるから、当然相互にかなりの重複があるはずである。もっとも、SBBを除けば、他の各誌は概して簡略な書評(むしろ注解とよぶべきであろう)しか収載していないが、それぞれに被書評書の選択の立場が違うので、特徴的な書評を求めることができるのも確かである。例えば、*Choice* は大学図書館の図書選択のための書評を目的としており、*Wilson*

## 参考図書の書評

*Library Bulletin* のそれは主として中小の公共図書館の図書選択を念頭においた書評である。したがって、幾つかの書評誌を相互補足的に利用することができる利点もある。

### 結 語

以上、アメリカの参考図書の書評誌として代表的な SBB を中心に、書評のあり方を検討したが、このような書評誌が育っていないわが国の場合には、これらから多くの有益な示唆をうけることができる。

種々批判はなされているものの、SBB は内容的に極めて高い水準の標準的な書評を収載しているといえることができる。したがって、このような形式の書評の特徴を生かすためには、被書評書の選択に十分留意し、紙数をあまり限定することなく自由に書けるようにする必要がある。

しかし、何と云っても、書評点数が極めてわずかであること、また書評にとって重要な要件である速報性がないといった避けたい欠点があることも事実である。したがって、この欠点を補うような他の書評誌がどうしても必要である。

わが国の場合、年間 300 点程度の参考図書が出版されるが、これらを適切に書評するためには、少なくとも *Wilson Library Bulletin* の “Current Reference Books” のように月刊で 20 ないし 25 点の参考図書をとりあげることが必要である。年間 250~60 点を選んで書評するならば、主要な参考図書はほぼ紹介することができるはずである。

もっとも、“Current Reference Books” は主として中小図書館における資料選択を予想して書評をしているから、大部で高価な参考図書はとりあげないことが多い。

これに対して SBB では百科事典、言語辞書などをはじめとする予約販売制をとる高価なセットものを中心にとりあげている。例えば、1933 年から 38 年にかけて 24 セットの百科事典を書評し、そのうち 8 セットは推薦できないとしているが、このような扱いはその後も続けられ、1962 年から 1968 年にかけての 5 年間に 25 セットの百科事典を書評し、10 点を推薦できないものとしている。第 2 表によっても 1964 年から 2 年間に 9 点の百科事典をとりあげているが、推薦は 1 点、条件つき推薦が 1 点で、残り 7 点が非推薦というきびしい結論を下している。

このような合議による権威のある書評がなされればこ

そ、“Current Reference Books” が比較的多くの参考図書を毎月とりあげ、軽妙な筆致で追込み書評をまとめることができるのである。

したがって、わが国でも *Wilson Library Bulletin* に連載されているような書評だけでなく、一方で SBB のように、図書館関係の専門団体を母体とする書評委員会を設け、そこで大部な参考図書をとりあげ、詳細な評価検討を加えた書評を發表する必要がある。

『日本の参考図書 四季版』が新刊の参考図書についてできるだけ網羅的に速報し、幾つかの専門誌がそれぞれ対象とする館種あるいはその規模を決め、適切な参考図書を選んで書評する欄を設けるならば、今日の事態はかなり改善されるだろう。その上に、SBB のような書評誌が館界によって守り立てられるならば、それは単に参考図書の選択に役立つだけでなく、参考図書の出版者に対して、その質的改善を求める館界の発言機関誌となるだろう。

- 1) 長沢雅男. “参考図書の出版——統計的調査,” *Library and information science*, no. 8, 1970, p. 5 によって継続もの以外の参考図書の出版点数をみると、1965 年 (328 点), 1966 年 (352 点), 1967 年 (354 点), 1968 年 (370 点), 1969 年 (378 点) といった状況である。
- 2) Goggin, Margaret K. and Seaberg, Lillian M. “The publishing and reviewing of reference books,” *Library trends*, vol. 12, Jan. 1964, p. 437.
- 3) Jones, Llewellyn. *How to criticize books*. New York, W. W. Norton, 1928. p. 70.
- 4) Gard, Wayne. *Book reviewing*. New York, Knopf, 1927. p. 13-14.
- 5) Mudge, Isadore G. *Guide to reference books*. 6th ed. Chicago, ALA, 1936. p. 2.
- 6) *Ibid.*, p. 2.
- 7) Shaw, Ralph R. Implications for library services. <Asheim, Lester, ed. *The future of the book*. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1955> p. 64.
- 8) Shores, Louis. “Books: Continuous communication,” *Saturday review*, vol. 41, Mar. 22, 1958, p. 26.
- 9) Butler, Pierce. Survey of the reference field. <Butler, Pierce, ed. *The reference function of the library*. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1943> p. 4-5.
- 10) Katz, William A. *Introduction to reference work: vol. 1, Basic information sources*. New York, McGraw-Hill, 1969. p. 12.

- 11) 三木 清. "辞書の客観性," *学鏡*, vol. 44, 1940. 5, p. 3.
- 12) *Ibid.*, p. 3-4.
- 13) Shores, Louis. *Basic reference sources*. Chicago, ALA, 1954. p. 18.
- 14) Katz, William A., *op. cit.*, p. 18-24.
- 15) 長沢雅男. 参考調査資料概説. 東京, 三田図書館学会, 1967. p. 97-104.
- 16) Mudge, *op. cit.*, p. 3-4.
- 17) 長沢, *op. cit.*, p. 100-102.
- 18) *Subscription Books Committee manual*. Chicago, ALA, 1969. p. 64.
- 19) *Ibid.*, p. 15.
- 20) 大阪市立大学経済研究所. 社会科学文献解説. 東京, 日本評論新社, 1948-53. 10 vols.
- 21) *Encyclopaedia of the social sciences*. New York, Macmillan, 1930-35. 15 vols.
- 22) *International encyclopedia of the social sciences*. New York, Macmillan and the Free Press, 1968. 17 vols.
- 23) Sills, D. L. "Editing a scientific encyclopedia," *Science*, vol. 163, Mar. 14, 1969, p. 1173.
- 24) 大阪市立大学経済研究所. 経済学小辞典. 増訂版. 東京, 岩波書店, 1956. 1434 p.
- 25) 大阪市立大学経済研究所. 経済学辞典. 東京, 岩波書店, 1965. 26, 1320 p.
- 26) 三木, *op. cit.*, p. 4.
- 27) *Staatslexikon; Recht, Wirtschaft, Gesellschaft*. 6. völlig neubearb. und erweiter. Aufl. Freiburg, Herder, 1957-63. 8 vols.
- 28) *Subscription Books Committee manual, op. cit.*, p. 15.
- 29) *Ibid.*, p. 15.
- 30) 栗原幸夫. "書評紙編集者の立場から," *学鏡*, vol. 61, 1964. 12, p. 9.
- 31) *Subscription Books Committee manual, op. cit.*, p. iii.
- 32) 現在は *Booklist* 誌に収載されている.
- 33) *Subscription books bulletin reviews*, 1964-1966. Chicago, ALA, 1967.
- 34) Goggin, *op. cit.*, p. 449.
- 35) *Ibid.*, p. 449.
- 36) Whitmore, Harry E. "Reference book reviewing," *RQ*, vol. 9, Spring 1970, p. 222.
6. Book review index.
7. Educational media index.
8. Three centuries of English and American plays.
9. Webster's new world dictionary of the American language.
10. American educator encyclopedia.
11. American family encyclopedia.
12. American peoples encyclopedia.
13. Cultural library.
14. Everyday reference library.
15. Grolier universal encyclopedia.
16. Hutchinson's new 20th century encyclopedia.
17. Universal world reference encyclopedia.
18. World university encyclopedia.
19. American Negro reference book.
20. Compton's dictionary of the natural sciences.
21. Concise encyclopedia of modern drama.
22. Concise encyclopedia of modern world literature.
23. Dictionary of the dance.
24. Dictionary of the social sciences.
25. Encyclopedia of poetry and poetics.
26. Encyclopedic dictionary of the Bible.
27. Family physician.
28. Golden book encyclopedia of natural science.
29. Illustrated history of furnishing.
30. International cyclopedia of music and musicians.
31. Kobbé's complete opera book.
32. Larousse encyclopedia of modern art.
33. Larousse encyclopedia of Renaissance and Baroque art.
34. McGraw-Hill illustrated world history.
35. Mantle Fielding's dictionary of American painters, sculptors, and engravers.
36. New dictionary of birds.
37. Pictorial Biblical encyclopedia.
38. Pictorial encyclopaedia of American history.
39. Better homes and gardens family medical guide.
40. Complete reference handbook.
41. Oxford companion to American literature.
42. Reader's encyclopedia.
43. Concise dictionary of American biography.
44. Cyclopedia of literary characters.
45. Dictionary of Canadian biography.
46. American book trade directory.
47. Directory of American scholars.
48. Museums directory of the United States and Canada.
49. Publishers' world.

#### 被書評書リスト

1. ABS Guide to recent publications in the social and behavioral sciences.
2. Bookman's price index.
3. Contemporary Authors.
4. Library of literary criticism.
5. Standard periodical directory.

参考図書 の 書 評

- |                                          |                                         |
|------------------------------------------|-----------------------------------------|
| 50. Who was who in America.              | 54. McGraw-Hill international atlas.    |
| 51. Science year.                        | 55. Oxford economic atlas of the world. |
| 52. Atlas of South-east Asia.            | 56. Oxford regional economic atlas.     |
| 53. Encyclopedia Britannica world atlas. | 57. World book atlas.                   |